

PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1997年12月 No.86

胎児を守る運動

ワシントン州のホテルに着いた時、「生まれました。会いに来てください。」というメッセージが私達を待っていました。12月20日のことで、夫と私はもうすぐ養子に迎えることになっている息子の誕生に立ち会うために、飛行機でアメリカを横断してきたところでした。冬の嵐のためにフィラデルフィアで遅れ、航空会社の職員に頼んで子どもの誕生に間に合う便に乗せてもらったのです。

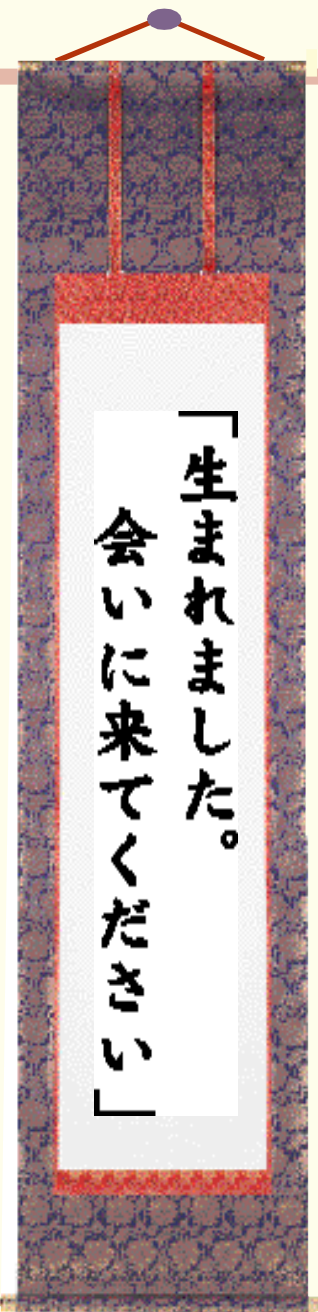
「生まれました。」というメッセージを読んだ時、子どもに会いたい気持ちを抑えることができませんでした。胸が高鳴るのを感じながら、レンタカーに飛び乗り病院に向かいました。午後5時半をすこし過ぎたところで、もう夕暮れになりかかっています。病院に近づいた時、我が目を疑いました。病院の屋根の上のクリスマス飾りの中に、屋根までその光の帯が達しているベツレヘムの巨大な星がありました。

夫と私はお互いに見つめあい、涙を浮かべ、あの星の下に私達の子どもが私達を待っていることを実感しました。ベツレヘムの星、ホテルでのメッセージ、12月の男子の誕生、これらすべてのことがクリスマスの物語とあまりにもよく似ていて、神様が私達の人生のためになされたとても輝かしい計画の真っ只中に自分達がいることを、実感せずにはいられません。

でした。

私達の物語はおよそ2年前に始まりました。しかしその時すでに、子どもと共に初めてクリスマスを祝った日の数々の不思議な出来事が、神様の私達のための計画の根本的な部分を占めていたのでした。私達は5年間の不妊との全ての闘いにピリオドを打つ決心をしたばかりでした。もし私達が親になり得るとすれば、養子を迎えるしか手立てはないだろうとわかった時、私は親になりたいと思つた理由を書き留めておきたい衝動に強くかられました。

晴れた元日の朝早く私は、子どもを産み、その子を愛し養育してくれる誰か他の人に託さなければならぬという、人生で最も難しい決断を最終的にしなければならぬであろう見も知らぬ女性に手紙を書きました。その手紙を書いている時、言葉がすらすらと湧き出てきました。私は春、夏、秋、冬の夫との生活の様子を書きました。結びの言葉を書く時、私達の生活ぶりを読んで、その女性はどんな



感じを持つかしらと思いました。

クリスマスシーズンを迎え終えたばかりの時、私は、聖母マリアがまもなく子どもが産まれることを知った時、どんな思いであったかということを考えてみました。そして、未婚の母が出産する時はどうなんだろうとも考えていました。私はルカによる福音書 二：19の「マリアは注意深くそのことを心にとどめて考え続けた。」のことを考えてみました。

「考え続ける」そう、それなのです。それこそが、我が子を養子に出すというとても難しい決心をする時に、母親が避けて通ることのできないことを一番よく表現した言葉だと思つたのです。そうして私は、「心の中でいろいろと考え続けて下さってありがとう。」と、見知らぬ女性に宛てた私の手紙を結びたいと思つたのでした。

私達の生活を説明するために選んだ表現の仕方だけでなく、まさにその手紙の結びの言葉が、母親を感動させ、子どもの養父母になつてもらいたくて私達に連絡を

とらせる理由になろうとは、思つてもみませんでした。

彼女は、私の書いた手紙を私達の弁護士を通して受け取りました。初めて彼女に手紙を書いた時から2年が経ち、今ここに、喜んでこの小さな赤ん坊に会いに来たのです。私達がおぼつかない足取りで、病院の廊下を通つて、産科へ上がつていく時、実際に感じていた喜びや、期待や、興奮を言い表わす言葉を見つけることはできません。

エリッサの部屋に近づくにつれて、胸が高鳴りました。エリッサが私達を子どもの養子先に選んでから数週間たち、その間に彼女のことをよく知るようになっていましたが、彼女に子どもが生まれてしまった今、彼女が私達に対してどのような対応をするのか、私達にはわかりませんでした。

次に起こつたことは、私には生涯決して忘れられないものとなりました。ドアをノックすると、エリッサが私達を快く迎え入れてくれました。私達が部屋に入った時、

彼女は赤ん坊を抱いていました。彼女は私達を見上げて、「こちらへ来て、あなたがたの坊やに会ってください。」と言いました。そして、その大事な生まれたばかりの赤ん坊を抱き上げて、私の腕に抱かせ、これから永遠に続く私達の愛の絆を作ってくれました。喜びの気持ちを抑えきれず、幸せと感謝の涙が私の頬を伝って流れ落ちました。その子、ケルビーは美しく、この上もなく素晴らしく、とても生き生きとしていて、初々しかったのです。私は、心が溶けてしまいそうな思いで、ケルビーを両腕で抱き締めました。

我が家に帰る旅も信じられない出来事の連続でした。飛行機の乗務員はクリスマススイブに生まれたばかりの赤ん坊を乗せたことに大喜びでした。彼らは、特別なかわいい乗客が生まれて初めてのクリスマスを迎えるためにこの飛行機に乗って我が家へと向かっていますと、ほかの乗客にアナウンスしたのです。彼らがインターホンを通して、「神の御子のイエス様は」を歌うと、客室全体が歌いだしたのです。私は感動に打ち震え、しばし、生まれたばかりの男の子を祝いに、見知らぬ人たちが馬小屋に集まってくれたとき、聖母マリアがどのような気持ちであったかがわかった思いがしました。

しかし、クリスマスに坊やを我が家に連れて帰れる喜びを味わっていても、長い時間飛行機に乗っていると、気圧が彼の小さな耳にひどいダメージを及ぼしはしないかと心配でした。私達が次々と神様のご加護を受けてきたことを考えれば、私達のすぐ後ろの座席に座っている男性が耳鼻科の専門医であることを知っても驚くに値しないことでした。彼は赤ん坊は大丈夫だから心配しないようにと言ってくれました。飛行中ずっと、坊やの耳を守るために、いつミルクを与えればよいか指示を与えてくれました。今でも、私はこの人が、私達の大切な子どもを無事に我が家へ連れて帰れるように、神様が私達の元に遣わされた天使だったと確信しています。

ついに飛行機がフィラデルフィアに着陸した時、私達のかけがえのない宝物である坊やがぐっすりと眠っていました。タラップを降りて少し歩いていくと、私達を出迎えるために、クリスマススイブにここまでやってきてくれていた家族や友人に取り囲まれました。

なんとたくさんの愛に恵まれ、たくさんのお恵を受けたことでしょうか。私達の人生において二度とこのようなことは決して起こらないでしょう。キリストがお生れになり、それを神

様が私達への贈り物とされたことの意味は、私達にとつてとても生き生きとした現実のものとなっていたのです。子どもを下さいという私達の祈りは、私達が想像しえなかった美しい形で叶えられたのでした。「私達に子どもが生まれ、男の子が授けられた。」そしてその素晴らしい思い出はすべて、感謝の気持ちでいっぱい私達の心の中に永遠に残るでしょう。

バーバラ・シベック

命の大切さを教える教訓

昨日私は、何年も前、息子がまだ大学生だった頃に、彼が書いたレポートを偶然見つけました。

それには、このようなことが書かれていました。

「何週間か前、中絶に関する映画を見ました。その映画の中で、胎児が中絶され、生きたまま、ゴミを入れる缶の中に投げ込まれ、息絶える姿を見ました。中絶された胎児の中には、実験用に冷蔵庫で保管されるものもあります。ある医者の話によると、中絶された胎児を冷蔵庫に入れ、外出して三時間後に戻ってみると、胎児の心臓はまだ動いていて、呼吸をしていたことがあったそうです。胎児はまだ生きていたのです。妊娠初期の段階で洗浄法によって中絶される胎児でさえ、実際には化学的な反応によって火傷を負い、子宮内で殺されているのです。そのような中絶を映し出すいくつもの場面があり、胎児の皮膚はまるで火の中に投げ込まれていた後のような有様でした。彼らは黒焦げになっているようでした。

私が中絶にそれほど強く反対する一つの理由は、もし20年前に、中絶が法律で認められていて、今と同じくらい簡単に行なわれていたら、今日私がこの世に存在していることはないからです。十代の高校生のカップルが、誤って私を妊

娠してしまったのです。私は、現在の私の家族に感謝しています。そして、人生で一度しかないチャンスを与えてくれたことに感謝しています。私は、受胎の時に始まるこのチャンスがすべての人に与えられるべきものだと思います。」

この子は医学の道に進みました。そして現在は地方で医者をしています。彼は患者の身体的な治療ばかりでなく、精神面での世話もしています。往診もします。診察料を、労働や、農産物や、さらには子牛で支払われることも経験しています。研修期間中、可能な限りいつでも、彼はハイチや西アフリカのトーゴなどの教会の運営する病院で、何週間もあたる時は何ヶ月間、ボランティアで勤務もしました。これを書いて今も、彼は休暇を利用してバンングラデシユの病院で働いています。彼の家族も同行し、自分達にできることは何でもして手伝っています。神は多くの命を護るために、この子を遣わされたのです。

他の多くの養子になった子ども達と同じように、私達の息子もこの病んだ世の中のために素晴らしい貢献をしています。毎年、中絶による大量の殺人で、社会が何を失ってきたかは誰にも分かりません。

#1

救いの出来事の初めに喜ばしい知らせとしてのべ伝えられるのは、イエスの誕生です。「わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。このかたこそ主メシアである」(ルカ2・10-11)。この「大きな喜び」の源は救い主の誕生ですが、クリスマスはまた、あらゆる人間の誕生の意味も余すところなく説き明かしています。メシア誕生の喜びは、あらゆる人間がこの世に生まれ出るとき喜びの礎であり、完成なのです(ヨハネ16・21参照)。

いのちの福音は、人間社会全体のためのもの

#101

「これらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです」(1ヨハネ1・4)。いのちの福音の啓示は、あらゆる民族によって分かち合わなければならない善として、わたしたちに与えられています。こうしてすべての人は、わたしたちと、また三位の神と親交を結びます(1ヨハネ1・3参照)。わたしたちがこの福音を他者と分かち合わず、ただ自分たちのうちにとどめるなら、わたしたちの喜びは完全なものにはなりません。いのちの福音は、信仰者のためだけのものではありません。すべての人のためのものなのです。いのちという課題、そしてそれを擁護し推進することは、キリスト者だけの関心事ではありません。信仰は特別な光と力とをもたらしますが、真理を探し求め人類の未来を案じるすべての人の良心にこの問題は起こります。いのちには確かに神聖で宗教的な価値がありますが、その価値は信仰者たちだけが抱く関心にとどまりません。このような価値は、人間だれもが理性の光でとらえることができる、そのような価値だからです。それゆえ、すべての人に必然的にかかわるものなのです。

したがって、わたしたちが、「いのちの民、そしていのちのために働く民」として行うすべてのことは、正しく解釈されるべきであり、賛同をもって迎えられるべきです。すべての罪のない人の一受胎から自然死に至るまでの一いのちの権利を無条件に尊重することは、あらゆる市民社会がよって立つ支柱の一つであると教会が宣言するとき、「教会は、人間的な国家を推進することを望んでいるにすぎません。それは、国家の第一の義務としてとくにもっとも弱い者の権利、人間の基本的権利の擁護を承認する国家です」。

いのちの福音は、人間社会全体のためのものです。人工妊娠中絶合法化に積極的に反対するのは、共通善を促進することをおして、社会の刷新に貢献することになるからです。いのちの権利を認めず、擁護せずに、共通善を促進することはできません。各個人の譲渡することのできない他のすべての権利は、いのちの権利に基づくのであり、いのちの権利から育っていくのです。一方で、人格の尊厳、正義、平和などの価値の重要性を主張しながら、他方で、とりわけ人間のいのちが弱くなり見捨てられるところに見られるように、その価値が奪われ、侵害されるさまざまな手段を許容し黙認することによって根本的には正反対のことを実践するとき、社会は堅固な礎を欠いているのです。いのちを尊重することだけが、民主主義や平和というような、社会のもっとも貴重で本質的な善の基礎であり保障となりうるのです。

すべての人格の尊厳を認めることなくして、また人々の諸権利を尊重することなくして真の民主主義はありえないのです。

いのちが擁護され守り育てられなければ、真の平和もありえません。教皇パウロ六世はこう指摘しています。「いのちに対するあらゆる犯罪は、平和への攻撃です。とりわけ人々の道徳行為を攻撃するとき、平和への攻撃となるのです。・・・しかし、人権が真に公言され、公に承認され、また擁護されるところでは、平和は社会においていのちの喜びに満ちた、適切な思潮となります」。「いのちの民」は、いのちにかかわる責務を他の多くの人と共有できることを喜びとします。それゆえ、「いのちのために働く民」が着実にその数を増し、愛と連帯の新しい文化が人間社会全体の真の善のために発展しますように。

安楽死は個人の自由と言えるか？

安楽死を支持する人はきまっ
て個人の自由という言葉をはきま
あいにし出す。死を強く望んでい
る人間を前にして、周囲がよし
たほうがいいと思っていて、も
やめるとその人に言う権利が一
体どこにあるのか、と。

彼らはよくこんな例を挙げて
説明する。重病で助かる見込み
がない人がいたとする。その人
は病院でありとあらゆる装置に
つながれ動くこともできず、か
るうじて息をしているにすぎな
い。その苦痛をいつたら半端
じゃない。「全装置を外してもら
い、自宅に戻って残された時間
を自由に過ごした後、静かに死
にたい」と懇願したが医師は聞
き入れてくれない。装置を外す
とあなたの死につながる。医師
という立場上、実行する訳には
いかないという理由で。

患者自身に決定権はないの
か？これはあくまで一般論で、
論点の本筋からそれるかもしれ
ないが、最近では、患者が望まない
治療を強制することはほとんど
ないと言っている。プロ・ライフ派も、
その治療がもたらす痛みや装置
に縛りつけられる苦痛などが病

気以上に辛いと判断されるなら
ばと、しだいに患者の拒む権利
に賛同しだした。例えば結果的に
死期が早まったとしても、その
方が楽しく生きられるだろうと。

対応が迫られる二つの問題。

第一、重い病気を患っている

人が、病気またはそれ以外の悩
みからひどく落胆し、死にたい
と思っている場合、彼らは自殺
を考えている人と何ら変わりが
ない。違つのは、心の内面の悩
みに加え、病気という悩みを抱え
ていることだ。もう以前のよう
に活発な生活ができないのでは
ないかと気弱になる人。家族の
重荷になって申し訳ないと思
う人。しかしソーシャル・ワーカー
や心理学者によれば、自殺をほ
のめかす時、心底から死にたい
と思っている人はまずいないと
いう。本当は、周囲の関心を集め
たいだけなのだ。「お願いだから
死ぬなんて言わないで。私達が
ついているから」「あなたがそん
なに辛い思いをしていたとは気
づかなかつた」と誰かに言っ
てもらいたいのだ。口では自殺と
言いながら、失敗に終わるよう
願っているのだ。もし自殺は個

人の自由だし喜んで手を貸そう
と思つたら、こんなふうには言
ばいい。「なるほど、君は、役立
たずの不具者で家族の重荷に
なっているし、医師の貴重な時
間も奪っている。君がいない方
が世の中のためだよ」

第二、病気により意志疎通が
困難な場合。昏睡・麻痺・病状悪
化による衰弱などで、言葉やそ
他のコミュニケーションが不
可能な人達。安楽死賛成派に言
わせれば、「生命の質」が低下し
ているので生きる意味がない。
よって生命を奪つてもよいとさ
れる。米国で一般的なのは、食物
や水分を与えず死に至らしめる
方法だ。何という残忍な殺人だ
ろう。通例、餓死への過程でけい
れんを起こさぬよう薬物を投下
し、「安らかに死んでいく」のを見
守る家族や友人にシヨックを与
えないようにする。「消極的安楽
死」と呼ばれている。「消極」と
は直接患者を殺していないとい
う意味だ。食料と水を「医学治
療」と見なし、その治療を止め
たにすぎない、というのが言い分
だ。

安楽死賛成派は「もちろん安

楽死は回復の見込みのない病人
に限る」と説明する。「回復の見
込みがない」とは治療せず放
つておけば数ヶ月で死ぬ人々のこ
とだ。だが食料や水も「治療」と
見なすなら、この定義に「当ては
まらない人」などいるだろう
か？食料と、水という「医学治
療」を奪われたら、おそらく皆、
数週間で死んでしまつたろう。

安楽死で恐ろしいのは、ある
人間が他人の人生が無意味だか
らと殺そうとすることだ。しか
し何より恐ろしいのは、社会の
お荷物になつた人間を「安楽死
させよ」という声だ。例えば、高
額な治療費が払えない。その治
療をしたところで患者の命はせ
いぜい数ヶ月延びるだけ。なら
ば他のもつと役立つことにお金
を遣うべきではないか？こま
で露骨ではない例としては「健
常者の豊かさ」のため、「欠陥者」
を減らそう。世界が「人口爆発」
の危機にある今、「余分」を減ら
そう。

まずは本当に過剰な治療とは
何かを見極めた上で、温かい
ベッド・食事・水、そして最低限
の医薬品を患者に与えるべきだ。
安楽死賛成派はこの点を誤解し
ている。人の命を延ばすために
無限に資源を費やせとは言つて
いない。(すべての患者が望むだ
けの治療を無償で受けられ、医
師や医療設備が充分すぎるほど

整い、さらに必要ならば他から借
りてくる体制を整えばいいのだ
が)とにかく、死に向かつてい
るからと故意に人を殺すなど言語道
断だ。

医師をしている友人からこんな
話を聞いた。友人が養老院へ診察
に行つたところ、所長から、先日
ある夫婦が老母の面会の帰り、彼
女を安楽死させてほしいと言つて
きたという。「おばあちゃんの遺
産がないとやっていけないから」
といとも簡単に言つてのけ、まる
で彼女の死を今かと待ち望んで
いるようだった。所長はすぐに彼ら
を追い返した。次に友人が、養老
院へ行くところから、あの夫婦は
おばあちゃんを他の施設に移し
た」と聞かされた。その二週間後、
彼女は亡くなつていく。

もうひとつは、オランダ人の医
師から聞いた話だ。癌に胃された
女性を診察し、木曜に入院させて
治療を開始した。効果は抜群で、
土曜には目ざましい回復の兆しが
見られた。日曜、このままだけ
全快も夢じゃないと思ひながら、
月曜に診察に訪れるとベッドには
別の患者が寝ていた。職員に聞く
と「彼女には移つてもらつた」と
のこと。「ああ彼女ね」と側にいた
研修医がこう説明した。「ベッド
が足りなくなつたので昨晩、注射
したよ」注射の中味とは、致死量
の薬のことだ。
こんな噂も聞いたことがある。

今オランダの高齢者達は、入院したら殺されるのではないかと、病院に来たがらないそうだ。国際反安楽死・機動部隊のリタ・マーカーによるとオランダ国内の死亡率の一・五%が安楽死だという。

数年前、米国コロラド州のリチャード・ラム知事が「治る見込みのない病気にかかった高齢者は、死んで席を譲るべきだ」と発言した（一九八四年三月二十九日ニューヨークタイムズ「死ぬ義務のある高齢者たち」より）。話題がいつのまにか「死ぬ権利」から「死ぬ義務」にそれってしまった。

ある人間が「何も生産しないし、「お荷物」だからと面倒をみるのをやめてしまう社会があつていいものか？人間の価値はその人がどれだけ多くの部品を作る能力があるかとか、税金をどれだけ払うかといったことでは測れないと思う。生きていく上で経済活動に加わらねばならない

が、それ自体が人生の目的ではない。経済の目的は人生を支えることだが人生の目的は経済を支えることではない。身体障害者や知的障害者、高齢者も、若い健常者と同じだけ価値がある。彼らがあまり経済に貢献していな

いこと（事実と言えなくもないが中には若者同様に活躍している人だっている）は人間としての価値とは無関係だ。

確かに、助けを必要としている人のためにしてあげられることには限りがある。時には辛い決断を迫られることも。例えば、患者三人に対し薬が二人分しかない場合。健常者だつて助けが必要なこともあるし、病気の人のためにすべてを与え尽くすこともできない。常に究極の選択を迫られながらも、自分にできることはもうないと、泣く泣く死んでいくのを見守らねばならないこともある。世の中は今、非人間的なことが多すぎる。その人が自分に与えてくれた分だけその人は生きられる、などと平気で言ってみたり、こんな社会を我々は本当に望んでいるのか？

©horightolive/



なぜ私達は人工避妊に

反対すべきなのか

人生において一人一人が認めなければならぬ根本的な真理が二つあります。一つ目は、神様が存在することです。そして二つ目は、私は神様ではないことです。この二つのことを理解することは、なぜ中絶が間違っているかを理解することなのです。神様だけが人間の命に対する絶対的な支配力を持つておられるのです。「私達のうちのだれも自分のために生きる者はなく、自分のために死ぬ者もない。」（ローマ人への手紙 十四：7）

こういう理由で、人工避妊は本質的に悪なのです。人間の命は受精の時に始まることを私達は知っています。しかし、神様は受精の時に人間の命を支配し始めるのではありません。それは始まりも終わりもない永遠のものなのです。

「神は世の創造以前から、キリストにおいて私たちを選び、」（エフェソ人への手紙 一：4）
「おまえを胎内につくるより先に、私はおまえを知っていた。」（エレミヤの書 一：5）
神様が永遠の中から私達をお選びに

なつたので私達は今存在しているのです。受精を妨げようとすると人間の決定は、人間の命に対して神様が支配している領域を侵害するものなのです。

中絶は人間の命を殺すものです。人工避妊は人間の性のあり方を破壊するものです。どちらも神様の怒りをかうものです。なぜならば、どちらも、人間の創造と生命の全過程の主として、神様を認めていないことになるからです。

夫婦にとつて子どもを持つべきではない状況が存在することを認めることは間違つたことではありません。このことに対しては、医学的、社会的、経済的、心理的理由や他の理由が存在しているのです。神様の支配を認めることは、神様から離脱した行動をとらない、ということの意味を意味しているのです。自分の家族の計画を立てる時に、自ら進んで性的な結びつきの意味を台無しにしてはなりません。自然な家族計画（産児制限）は正当なことなのです。神様は体の周期の中で、妊娠できない日をお与え

になり、その日には新しい命への扉を開き、その扉を閉ざしておられるのです。人工避妊すれば、私達はその扉を全く閉ざしてしまふことになるのです。私達にはそのようなことをする権限は全くありません。

聖書には、子どもは恵みであるとはつきり書かれています。「幸せなのはその矢で、矢筒を満たした者。」（詩篇 一二七：5）聖書にはまた、私達は命に対して寛容になり、私達の全ての疑いや恐れを神様の手に委ねなければならぬともはつきりと書かれています。キリストは次のように言われています。「心を騒がせることはない。神を信じさせて私をも信じなさい。」（ヨハネによる福音書 一四：1）私達が愛情に満ちた家族を築き、神様を信じていることができますように！

フランク・ベイボン

